



難波土地区画整理事業誌

大阪市難波土地区画整理組合

近世

◆畑地が広がっていた難波村

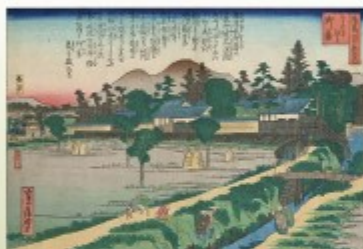
江戸時代、大坂の町は「北組」「天満組」「南組」の三つの行政区画で形成され、総称して「大坂三郷」と呼ばれていた。現在の難波地区周辺は郊外にあたり、三郷への野菜供給地として畑作が盛んであった。

1836（天保7）年の『新改正摂津国名所旧跡雑見大絵図』や、1863（文久3）年の『大坂産物名物大略』

（『国宝大坂絵図』改正増補所収）に、「難波村胡蘿蔔（こむら）」（ニンジン）が挙げられていることから往時がうかがえる。この難波村胡蘿蔔は現在、金時人参として「なにわの伝統野菜」に認定されている。

また、薬の名産地としても知られ、『摂津名所図会大成』巻之八（1855年〜）には、「難波村の蘆を作るに妙を得たり。且土地に相応なるべし。一村中多く作りてこれを製法す」と記されている。この蘆は、濃い色に染め上がる阿波産のものに対して、浅藍や空色など薄い色に用いられたそうである。

一方、江戸時代初期には難波村の中心地は東ノ町・西ノ町・北ノ町・中ノ町・上ノ町・山之町・下門之町・弓場ノ町の8カ町から成り、法興寺をはじめ大小二十余りの寺院が建ち並んでいたといわれる。



波流石景「なんばむら甚威」(大坂市立中之島図書館蔵)



波流石景「長町遊舟水鏡」
～波流石日本橋～丁目清涼いさをす
(大坂市立中之島図書館蔵)

◆幕府直轄の米蔵「難波御蔵」

1732（享保17）年、近畿から九州にかけて雨が数十日間降り続いたことによりイナゴやウンカなどの害虫が大量に発生、西日本各地が凶作に見舞われた。江戸三大飢饉の一つに数えられる「享保の大飢饉」である。

これを機に、幕府は災害時の救済米の備蓄と年貢米の集散を兼ねた米蔵を難波村に設置。東西70間(約127m)・南北180間(約327m)に及ぶ敷地に米蔵8棟を建て、天明からの年貢米を収納した。翌年には、輸送路として道頓堀川大黒横付近から御蔵に至

る、長さ473間(約860m)・幅8間(約15m)の水路を開削。新入堀川とも御蔵堀とも呼ばれた難波新川である。御蔵堀と称された由縁は、農民に土砂を運搬させ賃金を交付して救済に努めたことによる。

この御蔵のあった地は、後に専売局大阪第一煙草製造所 → 大塚球場 → なんばパークスへと変遷をたどる。

また、難波新川は1958（昭和33）年に埋め立てられ、その跡地に阪神高速道路が建設された。



私蔵改正大坂絵図<1845(弘化2)年>



難波御蔵・難波新川跡
<なんばパークス北入口付近>